イオム通信

Eld: KouMUKAI

2-12-2, ASAHIMACHI 1, ABENO, OSAKA, JAPAN 10

4, OKT, '82. N-ro. 263

イオム通信 向井 孝

大阪市阿倍野区旭町 2-12-2

▼ 7月14日・亡くなった河本敬次さんの生涯をしのんで・10月11日午后一時から、大阪梅田八大融寺〉で・ささやかな集りをする。一人10分〜20分ほど受持って・運動史のなかのアナ・ボルの流れ・私の見た大正・昭和戦前の社会主義者たち・大正・昭和(戦前)アナ運動の中の河本さん・河本さんからの聞き書きより・戦后の大阪アナ運動と河本さん・〈ひろば〉のころ・〈イオム〉のころ・神戸GEAの会と河本さんの手紙(いずれも復製)といったことで・山口・宮本・三輪・山口・山里・前田・平山・寺島・向井らが・しゃべる。会費八〇〇円。〈路頭のアナキスト〉と自称して・清貧の中で最後の最後まで・運動と共にあった河本さんの稀有の生涯を・この一日心から偲びたいと思っている。

▼ 今日は・ぼくにとって62回目(ナント!)の10月4日・Fさんが特上のかばやきを居けてくれて・それで一パイ。おいしかったナァ

(孝)

どう『反日』を理解したか

▼ 9・5集会づくりの過程で・集会なれ?した①②の人たちにとって、何となく物りないーというか、一体どんな集会になるのやらすこぶる覚束ないー心配が多分にあったとしたら、それは何よりも「基調報告」風のものが、全く見当らないーことが理由となるだろう。

▼ ふつう実行委は、まず基調報告草案づくりということで集会の意味づけと性格を論議し明らかにする。が実は、実行委を構成するいろんな人たちの意見が、一字一句の解釈・押入・削除をめぐって対立紛議がとめどもなくつづき、集会づくりのエネルギーの大半を費消して、うんざりしたあげくの妥協の産物という外ない。(だから・基調報告はたいてい無難かつ平板、「教科書的」で、切角苦心の作文も聴衆にとっては、右から左へ通りぬけて、めったに記憶にとまらない)

▼ ところで9・5集会では、基調報告とは銘うたれないまま集会づくりの過程がすゝむにつれ、メッセージ小委やシンポ小委でのリハーサルの中から・みんながそれぞれの立場で・自分なりの「基調」みたいなものを(ほとんど無自覚のまま)、だんだん形成していった、ということが云えないだろうか。

ぼくはリハーサルに加わったり、傍聴したりしてるうちに、ふとそのことに気付いた。そしてそんな基調の「つくられ方」にびっくりし・さらに「つくられていく」基調そのものの内容に感動し、多くのことを改めて学んだのである。

(もちろん「基調的なもの」は・それと意識して成文化し一般的に提示されなければ「基調」ではない。その意味に加えて、シンポの総括として・ここにその「基調的なもの」を追認的に、その要旨を簡単にかいておきたい)

1 「反日」の一般性

▼ たとえば教科書問題での「世論」、映画「侵略」の自主上映のひろがり(プリントが二百数十本も出たということなど過去にあったろうか)「安いバナナ」などをあげるまでもなく、「反日」がするどく告発してきた「こと」は、ごく一部(それをまだ知らない)及び特別の層を除いて、もはや一般的常識だと考えてよい。(すくなくとも今回の集会に来るような人々にとっては、その認識では殆ど一致する)(またとくに女性にとってそれを知ったときの強いショックー自分を加害者と考えるーは、共通的である)

▼ とすれば①の立場は、その一致した認識、以後から問題を出発させねばならない。が、その共通認識の部分としての「反日」、つまり教科書やバナナなどを、①の立場の専売特許的?なものとして、主力を挙して主張する。(それは勿論これはどくりかえしても足るものではないと云えるが)そのことは、反日のもっとも特徴的で、他の立場と異るところの主張の提示としては、今では決して充分でない。(それはすでに10年前から、まだ誰もが自覚していなかったとき、「東ア…」のみが問題としていたという先駆性と栄光を示すとしても。)

(シンポ小委で、②その他と対比して異る特徴をもっと明

この「イオム通信」は、恣意的に当方がお送りしているものですが、継続希望の方は、自分への宛名を表記し60円切手(半分は70円切手)を貼付した「送付用封筒」を、約半年分(6〜9枚) 向井宛お送り下さると、大へん幸いです。 向井 孝

東アジア反日武装戦線への 判決迫る

彼らを闇に葬らせるな

このあいだ駅で東アジア反日武装戦線の死刑に反対するビラをまいていたら、クチャクチャッと丸めて投げてよこした人がいました。そう、世間で「凶悪犯」「爆弾魔」といわれてきた、東アジア反日武装戦線の人たち。でも私たちは、彼らがなぜA級戦犯の牌を爆破したのか、なぜ天皇を殺そうとしたのか、なぜ大企業に爆弾をしかけたのかを知った時から、かれらを死刑にさせてはならないと思うようになりました。

それは私たちが歴史の流れと現実の中でどう生きるかという問いでもあったから。日本の敵科書かき換えに怒ったアジアの人びとの心の中には、日本の侵略で殺され、焼かれたなまなましい痛みが、資源収奪・エコノミックアニマルの国、日本への憎しみがありました。一日一食も食べられない生活もあるアジアの飢えと貧しさからかけはなれた、物のあふれる生活。アジアの森林を削りとって作られるトイレット・ペーパーや雑誌。アジアの人びとの低賃金重労働で生られて、日本で安く売られる衣料品。こうした現実の中から、アジアをはじめ、「第三世界」の人びとの生活を踏みしだいて、物質生活の繁栄を求めるわたしたち日本人の姿がうかびあがってこないでしょうか。

東アジア反日武装戦線の人たちは、すでに十一年前から、この侵略の歴史と現実を、行動をもって揺らしだしていたと思うのです。他の犠牲の上に生きることを拒み、この現実を少しでも変えようと行動を起こしたかれらは、そのために捕らえられ、ようとしているのです。

わたしたちは、かれらが歴史の中での自らの責任をみつめた真剣さに動かされるとともに、この死刑をみすごせば、日本が侵略への道を強めていくことに対しても無力になってしまうだろうと思っています。

いまかれらへの控訴審の判決が行われようとしています。かれらへの死刑をおしとどめるための行動に、どうかあなたも力を貸してください。

かれらを殺させないで!

◇ ◇ ◇

十月二十八日 判決前夜集会
六時半—八時半 日本キリスト教館四階(地下鉄東西線早稲田下車五分)遠方からの方のための宿泊施設あります

十月二十九日 判決公判
十時 日比谷図書館前(日比谷公園内)公判は一時半からです。一時 水谷橋公園(地下鉄銀座線京橋)から東京高裁へ。(デモ出発三時の予定)・終了後、判決当夜集会へ合流

十月二十九日 判決当夜集会
五時—東京弁護士会館(予定)東アジア反日武装戦線への死刑重刑攻撃を許すな10・29行動実行委 東京都荒川郵便局私書箱三六号〒〇三一八九一一七〇四七 (呼びかけビラから)

確に強調して…などという助言が、①に対していろいろ出たのは、その意味からである。）

2 「東ア」の〈反日〉

▼ つまり、とくに「東ア…」の、とかわず、「反日」の論旨については②③④も異論はない。スッと誰もがはいっていく。

それは〈加害者としての日本人―その自分〉を自覚的に知る―ということである。ついで〈知覚したことで、身にひきつけて考える〉―或は、〈考えねばならないということを考える〉―そして「どうすることもでけへん」という現実にぶつかって、どうしようもないまま―〈悩んだり〉〈開き直ったり〉〈思考をそのまま停止、棚上げしたまま〉―いつしか問題を忘れたり、遠のいていく―ということとして、そうなのだということである。

▼ とすれば、①にとっての〈反日〉とは、決してそれで終るものではない。①の〈反日〉が〈反日〉であるのは、加害者である日本人―自分を、〈事実行為で自己否定する〉というところにある。その〈事実行為〉こそが、①の反日の戦である。

▼ そして、その事実行為の実行として、ぼくらにきびしくつきつけているのが、「東ア…」の一連の〈爆破攻撃〉であり、その発展方向としての〈武装闘争〉ということになる。これを無視して東ア…の反日はない。

しかし、そこまでくると、はじめほとんど同調した「反日」の問題は、当然混乱し、改めて問い直されるだろう。

3 武装闘争の問題

▼ 〈武装闘争〉は、ごく一部の人々をのぞいて、決定的なまでに支持されない。（心情的支持とは、実行と無関係な処にいる立場と、その無責任さが醸成する情緒でしかない）

とくに④そして大多数の市民にとっての〈武闘〉は、そのトバッチリが自分の方へくるかもしれない―という〈被害者意識〉によって、ことの是非を問わず「イヤだ、きらいです」となる。

そのことを踏まえた上で、今回の9・5の場合、とくに④の立場はその当初からはっきりと〈支持〉あるいは〈不支持〉をきめてしまっているのではなく、〈東ア…〉に注目し関心をもつ者―という他点に立場をおくところから、「改めてその「反日」を問い直すこと」でなければならなかった―のである。

▼ シンポジウム小委などの話合いの中で、何が出てきたかを列記すると、次のようになる。

▼ **三菱爆破などでの死傷について**

① 〈武闘〉に対するとき、彼らが既に犯してしまった―三菱爆破などでの人命死傷の問題と、今後も続けられるものとしての人命殺傷の問題とは、わけて考える必要がある。

つまり、彼らがすでにやってしまったことを、どうみるか、これからも〈殺傷がおこる〉ということに、どう対処するかとは、权力の「裁く」と「捕える」が違うように、ちがう。

② 三菱の人命死傷について、彼らは深刻に自己批判し今後～そのようなあやまちはくりかえさぬと表明している。今後は、人命殺傷のおそれがある〈武闘〉はしない―ということと判断してよいだろう。

③ そのような彼らが―たとえ意図はなかったとはいえ、人命死傷をひきおこした―三菱爆破を決行し、今も尚〈武闘路線〉を主張するのか といえば―

― 私たちが、それほど深く真剣に考えることができず、どうしようもないと放り出し、日々見捨てている2と―〈反日〉を何よりも自分の責任として、問題として、彼らは考えたということ―その、誰のせいでもない、切実なおもい、から、という外ない。（誰とも比べようもない、といったが、しかし今、たとえば日本企業によって、その全生活の根拠を奪われようとしている現地住民にとって、もしその企業の本社ビルが眼前に平然として存在しているとすれば、当然、爆破したい位のものであるにちがいない。そのような立場を自分のものとすることによって、彼らは爆破斗争を当然としたのだろう）

④ それ故、爆破は、三菱本社ビルの存在と日々の活動が、現地の人たちの血涙と生死にかゝわっていることでの切実さ、切迫性―たとえ一日半日でも、いまその機能を阻止しなければ―という息づまるような思考と思い込みがあってこそ、出てきたぎりぎりのものだったにちがいない。

⑤ その思い込みの切実さ、真剣さは（たとえ行動との短絡性や効果で問題があるとしても）、決して非難されるものではない。むしろ人間として至上の誠実さである。

そして彼らにとっての、状況の緊迫性、緊急非常性を考えるならば、もはやそれは、一般的な善悪、可否の判断を超えるものとしてある。 そこで―

⑥ 私たちが〈反日〉を一応口にしながら、知りながら、彼らほどには考えず、何事もなしえないという事実の上で、なお、彼らの三菱爆破の死傷を云々することができるか。私たちにその是非を論じ、裁く資格があるのか。勿論ない。そして

私たちがいまなしうることは、彼らが犯した死傷の結果を自分も共にうけとめ、彼らを裁こうとする者に対して、彼らを支持支援する立場を明らかにすることではないか。

この意味で、〈武闘〉を支持しないということと、彼らを支持支援して裁かず、という、一般市民の彼らへの近接した関係が、はじめて成立することになる。

4 反政治的多様性

▼ はじめごろ、①と②は「どこがちがうのかわからへんし」というのが④だった。 ②の①に対する「労働者階級を変革の主体とする―階級闘争としての視点に欠ける」という批判。それに対して①の②へ対する、社会主義国家や「総評」にみられる労働運動、労働者階級の現状を指摘して、その反動性をあげての反批判。（が、もちろん②は、いまの労働運動や労働者の現状に期待するのでなく、それを批判し乗り越える新しい〈労働者〉の出現と可能性の未来に賭けているのであって、①の批判をも肯定した上でなおー）である。）

（とすれば①あるいは②の批判的主張の当否は、いまは、今後将来の状況の発展的動きによって判断されるものでしかなく、現在、ことさらにその二点にかかわってきびしく理論対立することは、むしろ权力を喜ばせることとなわねばならない。④が「①と②のちがいがわからへん」となったのは、そのような「異」或は「多義性」を認める〈連合と立場〉としていたからだろう）

▼ しかし②が「階級を識にのぞめに新しい労働者層の新生、その労働者層を主体とした武装闘争」の主張であるのに対して、「東ア」が「三菱の教訓をいかしつゝ」かつ主張する〈武闘〉（万一にもの死傷をさけた武闘の困難さと可能性の有無をはらんだ）のそれとは、共に願望性、仮定性において同じでありながら、質的には大きくちがっている。

▼ ごく短絡的結論をいえば―「東ア」の①は既成の政治主義を超えたものとしておのずから、反政治的それゆえに自由連合的に、多義性多様性としての〈反日〉を示唆しており、それこそが①と④とを結びつけ、かつてない共闘の新しい主体をつくる可能性に外ならぬからである。